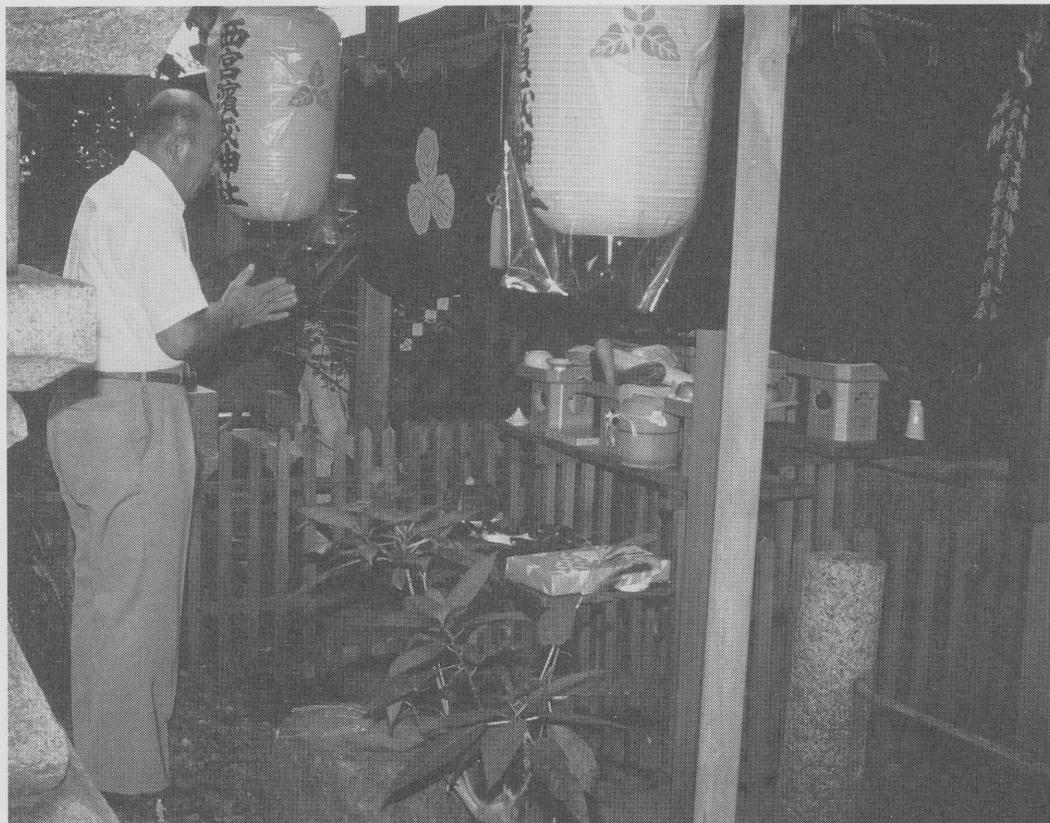


THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA CITY MUSEUM

西宮市立郷土資料館ニュース 第14号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662 電話0798-33-1298



浜戎まつり

目次 CONTENTS

盛徳講「おかげ施行控」について (池田直子) …5

西宮の漁業～浜戎まつりについて～ (土居佳代) …6

寄贈資料一覧…8

盛徳講 「おかげ施行控」 について

池田直子 (当館嘱託)

平成五年五月、西宮市屋敷町の吉川節氏より盛徳講(伊勢講)の文書の寄贈、講道具の寄託を受けた。文書は全部で一点である。その中から文政一三年(一八三〇)の「おかげ施行控」を紹介する。「おかげ施行控」は、縦三五・五センチメートル、横一二・四センチメートルの横帳で、墨付四丁(全五丁)である。

伊勢講は、伊勢参宮を目的として講員が費用の積立を行い、その代表者を参宮(代参)させるものである。盛徳講は現在も活動を続けており、西宮市森具地区に約三〇名の講員がいる。森具は現在の行政上の地名には残っておらず、川西町・殿山町・雲井町・相生町・羽衣町・霞町・大谷町・郷免町・御茶屋所町・松下町・屋敷町・弓場町・松園町・中浜町・深谷町・木津山町・松生町・高塚町がその範囲である。しかし、現在の講員は、屋敷町・弓場町・郷免町・川西町の辺に住んでいる。今回寄贈された文書には享保一〇年(一七二五)の「伊勢御参宮道中日記」があり、少なくとも江戸時代の中頃には盛徳講があったようである。盛徳講の名前の由来は不明である。寄贈

文書の中で盛徳講という名が出てくるのは大正期の文書に限られているので、享保の頃から盛徳講と呼んだかどうかは明らかでない。文書の中には伊勢講と書かれたものがあるので、単に伊勢講と呼ばれていたのかもしれない。また、森具には盛徳講とは別に西の伊勢講という講もある。

ところで、周知のように、おかげ参りは、通常の伊勢参りとは別に、特定の年に爆発的におこった集団伊勢参宮である。慶安三年(一六五〇)、宝永二年(一七〇五)、明和八年(一七七二)、文政一三年(一八三〇)、慶応三年(一八六七)に、大規模なものが起こっており、だいたい五〇〜六〇年の間隔でおきている。明和八年と文政一三年のときは全国的規模で流行した。

「瓦林組大庄屋岡本市兵衛旧記調・日記」⁽¹⁾には文政一三年のおかげ参りのことが詳しく記されている。それによれば、三月二六・七日ころより阿波の国の者が参宮したのをきっかけに、二八・九日には明石・兵庫あたりから参宮し、閏三月一日には西宮・尼崎に御祓がふり、二日には西宮からも大勢参宮し

た。

また、『櫻戸雑話』⁽²⁾には「此度は所々其領主より参宮人往來煩ひ無き様命せられ、道中筋之外在々の家にて人も人を宿させ、又路用なき者にハ施行宿など有て、さはかりの夥敷人数なりしかともさらに飲食寐臥の煩ひなく参詣をとけしなり」と、領主より施行の命令が出ていたことを記している。また、「瓦林組大庄屋岡本市兵衛旧記調・日記」には「道中筋旅籠や宿賃高直ニいたし候由にて、大坂御奉行所并所々御奉行所より御世話有之下直ニ相成候由、其外悪徒もの入込候由にて夫々御手宛有之由、とりくと風聞いたし候事」と記されている。参宮者は老人・女性にもおよび、小児を背負って参宮するものもあつた。参宮者は大群集となつて街道筋を往來した。このため、高騰した旅籠や宿賃が奉行所の計らいで値下げされたこと、混乱に乗じて人さらいなどの悪徒が現れたが、奉行所が適当に手配したようである。領主、奉行所などは参宮者を援助し、悪徒を取り締まり、社会的混乱を收拾しようとした。おかげ参りは、主人、家族の者に何も告げず、何も持たずに家を出るため、街道筋の施行がなければ伊勢参りを果たすことは難しい。『櫻戸雑話』には「御仁政の恵沢仰へし」と賛美されているが、「瓦林組大庄屋岡本市兵衛旧記調・日記」には「往還掛り村々難義二候、おかけ参りハ別て御町寧にて大難儀二候」とあり、あまりにも

大勢の人々が参宮するため、街道筋で施行を行うことがだんだん困難になつていった。施行を頼みにしての参宮であるので、施行が少なくなるにつれて、おかけ参りは次第に収まつていったと思われる。

この「おかけ施行控」の興味深い点は、盛徳講の講員が伊勢参宮するために費用を用立てたのではなく、この年大流行したおかけ参りのため施行をした西宮町へ米などを寄付していることである。おかけ参りは三月二六日ごろから始まり、閏三月二日に西宮からの参宮者が加わり、四月上旬に下火になつている。盛徳講の寄付は最盛期と思われる閏三月一六日に行われているので、森具地区に割り当てられた分だけでは施行が不十分であつたため、さらに盛徳講に割り当てられたのではないかと思われる。

以下に、「おかけ施行控」の全文を掲げる

【おかけ施行控】

(表紙)

文政十三年寅閏三月
おかけ施行控

講中

口上

大神宮おかげ参宮、当年三月廿五日より阿州ぬけ参宮当地へ来
ル事、凡毎日式三千斗りツ、詣てけるが、神徳不思議、富貧を
不限腰ニ杓さす事当おかげ人気なりト見へける、右ニ付施行町々
在々残所なく有りける故、当所施行方名前左記之、

覚

一、白米式斗	幸右衛門	一、同 三升	礮右衛門
一、同 式斗	惣左衛門	一、同 々	与一右衛門
一、同 式斗	兵右衛門	一、同 々	兼右衛門
一、白米壹斗	万右衛門	一、同 壹升	平兵衛
一、同 五升	惣右衛門	一、同 々	吉兵衛
一、同 五升	忠兵衛	一、同 々	与左衛門
一、同 五升	惣五郎	一、白米壹升	仁右衛門
一、同 々	喜兵衛	一、同 々	茂左衛門
一、同 々	佐右衛門	一、同 々	源三郎
一、同 々	六兵衛	一、同 々	喜八
一、同 々	三十郎	一、同 々	善六
一、同 々	弥右衛門	一、同 五合	政右衛門
一、同 々	源五郎	一、同 三合	髮結 霧吉
一、同 々	新助	一、同 式升	平四郎
一、同 々	彦兵衛	一、同 七升	弥七
一、同 四升	兵助	一、同 壹斗	甚八
			車 山之神

杓石七斗三升八合

一、錢四百匁 甚右衛門

一、同式百五十六匁 源二郎

一、同式百六匁 仁左衛門

一、同百三匁 弥助

一、同百匁 清三郎

一、同百匁 作兵衛

一、同百五十五匁 儀兵衛

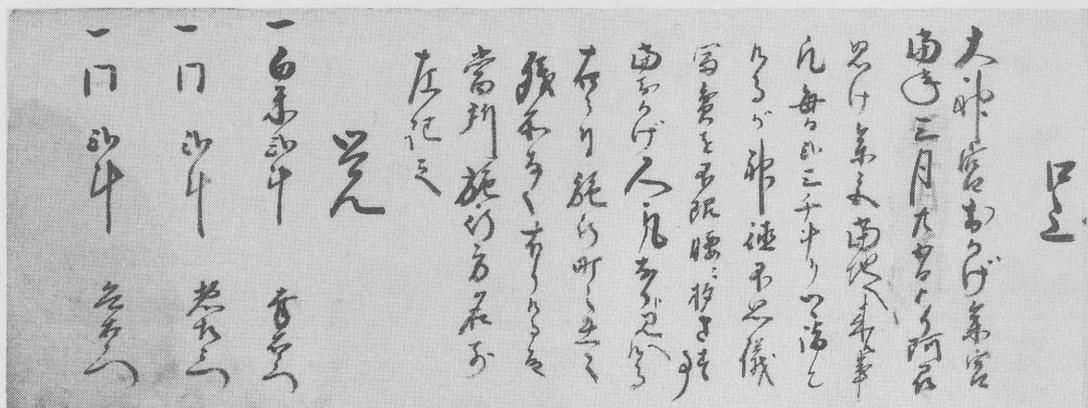
一、同百匁 喜代藏

杓石四百廿四匁

右之通施行隨氣ニ付、閏三月十六日西宮町施行場へ相渡罷有候、

註(1)『西宮市史』第六卷 武藤誠・有坂隆道編 西宮市役所 一九六四年

(2)『櫻戸雑話』 坂倉信明 文政一三年(資料紹介) 坂倉信明『櫻戸雑話』 池田直子『西宮市立郷土資料館研究報告』第二集 西宮市立郷土資料館 一九九三年)所収



「おかげ施行控」

西宮の漁業～浜戎まつりについて～

土居佳代(当館囑託)

1、はじめに

平成3年より進めている漁業の調査は今年で3年目に入りました。今回は、『西宮市立郷土資料館ニュース』第11号⁽¹⁾に続き、高田善章氏（昭和2年生まれ）のお話をもとに西宮の浜戎まつりについて紹介します。

2、浜戎神社と住吉神社について

a) 浜戎神社について

浜戎神社は、現在の西宮市東町1丁目あたりにありました。浜戎神社は本殿を囲むように森があり、大きな神社だったといえます。現在はカワテツ（川崎製鉄株式会社）の所有地になり、浜戎神社はさらに西へいった西宮市西波止町の住吉神社の境内にまつられています。

浜戎神社が移転したのは、昭和39年12月のことで、移転の理由は、カワテツが土地を必要としていたこと、漁師の数が減り、まつりをする人も少なくなってきたことにあります。

神社移転時の代表者は、高田氏(話者の父)・海德氏・油野氏・島田氏・岩本氏・西明氏・久保氏・空谷氏でした。代表者が高齢だったり、亡くなられた場合は、まつりには息子さんや家族の方に来てもらっています。岩本氏は岡山県日生の出身で、もともと西宮出身ではないのですが、西宮で漁をしていたということで代表者に入ってもらっています。

b) 住吉神社について

住吉神社は社伝によると、寛政・享和の頃、西宮の米穀商人当舎屋金兵衛が阪神間の海上輸送の便宜をはかろうと西宮港湾の修築を計画し、工事を起こすにあたって海上守護の神として文化2年(1805)に勧請されました。明治36年(1903)7月には、西宮市石在町にあった金刀比羅神社を合祀しています。

3、浜戎まつりについて

a) 浜戎神社の浜戎まつり

ずっと昔から、毎年9月10日にまつりをしていました。「漁師のまつりといったらエベッサンで、ここでは浜戎まつりをする。浜戎まつりは秋にするし、9月のまつりの頃からジャ

コ（鰯の稚魚のことで、加工して、だしじゃこや干鰯にする）がずっと良くなってくる。浜戎まつりのすんだ9月10日頃からジャコの油がぬけて、いいジャコになった。9月10日をすぎないことには良くならなかった。」といます。

境内には土俵があり、高田氏が5、6歳頃だった昭和7、8年頃には、まつりの日に宮相撲をしました。大人も子供も相撲をとり、漁師さんの中でも相撲をとる人がいました。

話者の家で漁師として働いている人の中で、とても相撲のうまい人がいました。長崎県の五島列島の出身で金崎伊佐一といます。金崎氏は「どうしても相撲が好きで、相撲がしたい」と言うので、漁師をやめて高田氏のおじを通じて大相撲出羽海部屋に入門したそうです。金崎氏は五ツ島というしこ名で大関まで昇進しました²⁾。

宮相撲は相撲の強い人が中心になって、昭和14、5年頃まで行われていました。

出店は3、4軒ほどあったそうです。高田氏が子供の頃は10銭か15銭をもらってまつりに行きました。まつりに行くまでの道は細いので夜になると、とてもさみしかったそうです。

まつりは、アミヤさん（網元）が中心になって行われていました。

b) 住吉神社の浜戎まつり

最近では9月10日に近い日曜日にまつりをしています。この日は西宮市の中津や芦屋市の打出でも浜戎まつりがあるので、神職が午前9時に出発して打出と中津の戎神社をまわり、最後に住吉神社につくのは11時か12時頃になります。

式典では祝詞をあげ、湯立てをし、神楽を奉納します。最後に弁当が出て直会をし、住吉神社が用意したくじ引きをして景品をもらって帰ります。参加者は10人ほどです。

まつりのお供え物は、漁をしていた頃は旬のもの（チヌ）をとって用意しました。とれないときは買ってきたり、ハマチを飾ったりします。必ずタイでなければいけないというのではなく、そのとき用意できる魚をお供えしました。

オダイ（三方）には、ダイコン・ニンジンなどの野菜やお菓子など、みなさんが持ってきてくれた物を飾ります。

c) まつりの運営費用について

昭和48年まで、西宮の漁師さんからの寄付金でまつりを行っていました。昭和45年に漁業権を放棄し、その補償金の中から2万円から5万円なりを集めて、まつりの運営費用にしました。集めたお金は住吉神社で預かってもらい、昭和49年からは寄付金を募ってそのお金を銀行に預け、その利子でまつりを行うようになりました。22人の漁師さんから寄付があり、それからは毎年寄付をださなくても良くなりました。当時のことを高田氏は次の

ように話しています。「だんだん漁業が衰退してくるし、そこへ毎年毎年まつりをするたびにお金を集めてたら、先どうにもできなくなる。住吉神社の神主さんが『お金を積み立ててその利子でやりましょう』と案をだしてくれた。それで多額のお金が集まった。」ということです。当時の記録は住吉神社に残されています。預金の利子で足りないときは、寄付でまかないました。まつりの費用は住吉神社で管理し、会計は話者が担当されています。

4、おわりに

以上のように、浜戎まつりは西宮の漁師さんたちの信仰を集めて行われました。現在は、数名の元漁師さんの手で続けられています。

註(1)土居佳代「西宮市内の漁業について～地曳き網から船曳き網へ～」『西宮市立郷土資料館ニュース』

第11号 西宮市立郷土資料館 1992年

(2)景山忠弘・小池謙一共編著『古今大相撲力士事典』国書刊行会 1989年

寄贈資料一覧（平成5年6月～11月、敬称略）

火鉢・たばこ盆・裁縫箱（阪下貞雄）、鳴尾川西航空機海軍二式飛行艇竣成記念盃・在郷軍人会バッジ・昭和5年聴取無線電話私設許可書・昭和12年防毒班副班長嘱託状・有隣防護分団朝妻町駐在員嘱託状・昭和12年度京津防空演習謝状・昭和16年支那事変第4周年記念兵庫県集団強歩大会参加証・同適格証・昭和11年皇陵参拝記念帖・拾圓札・一般用米穀類購入通帳・戦時生活関連図書（奥出良雄）、カラスキ（田中国恵）、毛布・婦人こども大博覧会記念品そろばん・昭和20年3月15日付毎日新聞（河知利平）、フゴ・コタツ（梶本久一）、明治26年『高等小学帝国唱歌』下巻・明治21年『高等小学読本』第八・明治34年『明治時代文範』（築山般子）、『箋註蒙求校本』・『標注校正小学合璧』・『輿地史略』・『清国史略』・『日本外史』・『皇朝史略』・『伝家の宝典自治體之沿革』・錠前（加島良一）、一七式防空防毒面・『瓦斯防護教範』・『勅語勅諭集』・国策便器（岡 貞邦）

ご寄贈ありがとうございました。

西宮市立郷土資料館ニュース第14号 1994年(平成6年) 1月1日発行